



Title	三国物語の変遷 : 清代の抄本をてがかりとして
Author(s)	井上, 泰山
Citation	関西大学東西学術研究所々報, 78: 6-9
Issue Date	2004-04-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/2542">http://hdl.handle.net/10112/2542</a>
Rights	
Type	Article
Textversion	

# 東西学術研究所々報

第七十八号

(平成十六年三月十二日 研究例会報告)

## 三国物語の変遷―清代の抄本をてがかりとして―

異文化受容研究班

異文化受容研究班  
井上泰山 研究員

「写本の比較研究」のセクションから井上泰山研究員が発表を行った。司会は平田渡研究員が行った。

### 発表要旨

楊貴妃・王昭君と並んで中国三代美人の一人に数えられる「貂蟬」なる女性が、実在の人物ではなく、語り物や小説『三国志演義』などの所謂「俗文学」の中で創造された架空の人物であることは周知の事実であるが、貂蟬の人物像そのものについては、従来あまり深く検討されることはなかった。本発表では、貂蟬が活躍する所謂「連環計」の一段に焦点をあて、小説・戯曲・語り物など、異なる文学表現形式のもとで貂蟬の行動とその末路がどのように変質していくかという点を明らかにした。小説『三国志演義』では呂布亡き後の貂蟬の行動は全く不明であるが、明代の戯曲や清代の「子弟書」とよばれる語り物においては、新たに、曹操に軟禁された関羽との交渉場面が設定され、関羽との間で数々の問答を交わした後、結果的に関羽に斬り殺される結末になっていたり、あるいは、最終的に出家・もしくは昇天してしまったりする。

近年発見されたスペイン・エスコリアル修道院所蔵の戯曲『精選統編賽全家錦三国志大全』や、本学図書館所蔵に係る『清蒙古車王府戯曲本』の一部「十問十答」などの内容を吟味することによって、明代から清代にかけて貂蟬像が変質していく様を検証し、「三国物語」が時代の要請に応じて変貌していく具体的事例として位置づけた。なお、『清蒙古車王府蔵曲本』は清末の北京で流行していた様々な芸能の全容を伺うための貴重な資料であり、今後もし引き続き調査を進める予定である。

### (論文)

- 『六十家小説』刻字考』『関西大学文学論集』五十三巻三号(二十三頁〜四十三頁)二〇〇四年一月

### (書評)

- 『中国四大奇書の世界』『懐徳』七二号 六八頁〜七二頁 二〇〇四年一月 (発表)

- 「三国物語の変遷―清代の抄本をてがかりとして―」関西大学東西学術研究所平成十五年度第九回研究例会 二〇〇四年三月十二日 関西大学東西学術研究所

